

国立青少年教育施設で発生した熱中症に関する調査報告

阿部麻由里（国立青少年教育振興機構）

キーワード：熱中症、青少年教育施設、発生状況、要因

1. 背景と目的

国立青少年教育振興機構（以下、「青少年機構」という。）が有する全国 28 の青少年教育施設では、利用者が安心して研修活動に取り組めるよう、施設で起きた事故や傷病の発生状況を把握するとともにその傾向や要因を検証することで、事故ゼロを目指した施設運営に取り組んでいる。

これまで青少年機構では、平成 30 年度より、傷病の個別情報と傷病が発生した状況や要因を各施設から収集し、「傷病の概況」として毎年度公表することで、安全な施設運営に寄与してきた。

しかしながら、熱中症については明確な項目を設けず、「発熱」した場合に、その原因が「熱中症か否か」だけを問う項目としていた。一方で昨今、熱中症による救急搬送が全国的に増加しており、体験活動においても熱中症は注意しなければならない傷病の一つとなっている。体験活動における安全管理体制の検討のために、国立青少年教育施設における熱中症発症の現状と背景及び周辺状況に関する詳細な調査の必要性が高まったことから、これらを明らかにすることを目的に令和 6 年 7 月～9 月にかけて、国立青少年教育施設の利用者を対象に、熱中症に関するアンケート調査を行った。

本報告では、アンケート調査で収集した情報を基に、国立青少年教育施設における熱中症の発生状況や要因の分析からその傾向を明らかにし、そこから考察される安全対策のポイントについて示すこととした。なお、本報告における熱中症とは、熱中症として確定診断されたものではなく、たちくらみ、筋肉痛、大量に汗をかく、頭痛などの熱中症疑いのある症状も含んでいる。

2. 調査の概要

2.1. 収集するデータの条件

国立青少年教育施設の利用者で、熱中症及び熱中症の疑いの症状が見られた者。

2.2. 調査の実施施設と期間

調査は、青少年機構が運営する全国 27 の地方施設（国立オリンピック記念青少年総合センターを除く）で実施した。調査期間は、令和 6 年 7 月 12 日（金）～令和 6 年 9 月 30 日（月）の合計 81 日間とした。

2.3. 調査の内容

従来使用してきた傷病情報の収集フォームの項目を基に、関係資料を参考にしながら検討した結果、記載内容の詳細を、①症状が見られた者の情報（活動施設、性別、年代）、②症状がみられた日時、天候、環境、気温、湿度、活動場所、活動内容、病院の受診状況、処置・静養後の状況等、③現れた症状、症状がみられるまでの状況、④熱中症になった要

因（本人、指導・引率者、装備等、環境、その他）とした。

2.4. アンケートフォームの回答者

「2.1. 収集するデータの条件」に該当する場合、該当者の引率・指導者又は本人が、アンケートフォームより回答することとした。利用者において対応が困難な場合、施設職員等が情報を聞き取り、アンケートフォームに入力する対応も可とした。

2.5. データの集計

収集した情報は発生月を軸に、各項目とのクロス集計を行い、熱中症の発生状況や要因の分析からその傾向を明らかにし、そこから考察される安全対策を検討した。集計の結果によっては、パーセントの数値の小数点以下第2位を四捨五入しているため、必ずしも100%にならない場合がある。

3. 結果からみる熱中症の発生状況とその要因分析

3.1. 熱中症の現況

令和6年7月～9月に施設で発生した熱中症の件数は55件で、そのうち、発生月が不明だったケースが2件あったため、この後の集計はこの2件を除外して母数を53件として行った。性別の内訳は男（25件・47.2%）、女（27件・50.9%）、不明（1件・1.9%）で、発生月の内訳は7月（30件・56.6%）、8月（15件・28.3%）、9月（8件・15.1%）であった。また、年代については小学生（33件・62.3%）、中学生（6件・11.3%）が上位を占めていた。

「国立青少年教育施設における傷病の概況（令和4年度調査）」¹⁾をみると、月別の熱中症（発熱）の発生件数・割合は、夏本番を迎える前の6月が最も多く（25件・26.0%）、次いで7月（23件・24.0%）、9月（16件・16.7%）が多くなるという傾向がみられた。本調査の結果でも、同様の傾向がみられたことから、熱中症の発生は、本格的な暑さが始まる夏前の6月から注意する必要があると考えられる。

3.2. 熱中症の症状がみられた時の状況とその要因

3.2.1. 症状がみられた時間帯

時間帯についておおよその時間帯をみると、「11時」（13件・24.5%）が高い割合を占めており、次いで「12時」（10件・18.9%）、「16時」（6件・11.3%）となっていた（表1）。青少年教育施設における標準的な活動時間で分けた場合、午前中と午後の各々の活動時間帯枠に相当する「午前（9～11時）」（20件・37.7%）、「午後（13～16時）」（14件・26.4%）の順に発症件数が多くなっている。

表1 熱中症の症状がみられた時間帯

時間帯		7月	8月	9月	合計	%
起床・朝食等	6時	0	1	0	1	3.8
	7時	1	0	0	1	
	8時	0	0	0	0	
活動(午前)	9時	2	1	0	3	37.7
	10時	0	3	1	4	
	11時	11	2	0	13	
昼食	12時	5	3	2	10	18.9
活動(午後)	13時	0	0	0	0	26.4
	14時	4	2	0	6	
	15時	0	0	2	2	
	16時	4	0	2	6	
夕食・入浴等	17時	0	0	0	0	3.8
	18時	1	1	0	2	
活動(夜)	19時	0	1	0	1	1.9
	20時	0	0	0	0	
	21時	0	0	0	0	
	22時	0	0	0	0	
就寝	23時～5時	2	0	0	2	3.8
不明		0	1	1	2	3.8
計		30	15	8	53	100

※左端の時間帯は、施設の標準的な生活時間帯を示している。

3.2.2.症状がみられた時の天候

天候についてみると、「晴れ」(44件・83.0%)が最も高い割合を占めており、次いで「曇り」(5件・9.4%)となっていた。

3.2.3.症状がみられた時の気温、湿度

気温、湿度についてみてみると、気温については「33度」、「35度」(それぞれ9件・17.0%)が最も高い割合を占めており、次いで「30度」(8件・15.1%)となっていた(表2)。なお、30度以下であっても全体の17%の発生割合を示していることにも注意が必要である。湿度については、50%以上の回答のみとなっており、「60%台」(13件・24.5%)、「50%台」(11件・20.7%)となっていた(表3)。

表2 熱中症の症状がみられた時の気温

気温		7月		8月		9月		合計		%
		件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	
25～29度	25度	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	1.9%	17.0
	26度	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	1	1.9%	
	27度	1	3.3%	1	6.7%	0	0.0%	2	3.8%	
	28度	1	3.3%	0	0.0%	2	25.0%	3	5.7%	
	29度	1	3.3%	1	6.7%	0	0.0%	2	3.8%	
30～34度	30度	5	16.7%	1	6.7%	2	25.0%	8	15.1%	52.8
	31度	2	6.7%	1	6.7%	0	0.0%	3	5.7%	
	32度	0	0.0%	3	20.0%	1	12.5%	4	7.6%	
	33度	9	30.0%	0	0.0%	0	0.0%	9	17.0%	
	34度	0	0.0%	4	26.7%	0	0.0%	4	7.6%	
35度以上	35度	6	20.0%	2	13.3%	1	12.5%	9	17.0%	18.9
	38度	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	1	1.9%	
不明		5	16.7%	0	0.0%	1	12.5%	6	11.3%	11.3
計		30	100.0%	15	100.0%	8	100.0%	53	100.0%	100.0

表3 熱中症の症状がみられた時の湿度

湿度		7月		8月		9月		合計		%
		件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	
50%台	50%	8	26.7%	0	0.0%	0	0.0%	8	15.1%	20.7
	55%	2	6.7%	0	0.0%	0	0.0%	2	3.8%	
	59%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	1.9%	
60%台	60%	1	3.3%	3	20.0%	0	0.0%	4	7.6%	24.5
	62%	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%	
	63%	5	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	5	9.4%	
	68%	2	6.7%	1	6.7%	0	0.0%	3	5.7%	
70%台	70%	1	3.3%	3	20.0%	1	12.5%	5	9.4%	15.1
	72%	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	1	1.9%	
	77%	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%	
	79%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	1.9%	
80%台	80%	1	3.3%	1	6.7%	0	0.0%	2	3.8%	5.7
	88%	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%	
90%台	92%	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	1	1.9%	1.9
不明		7	23.3%	5	33.3%	5	62.5%	17	32.1%	32.1
計		30	100.0%	15	100.0%	8	100.0%	53	100.0%	100.0

3.2.4.症状がみられた時の環境、活動場所

環境、活動場所についてみると、環境については「屋外」（38件・71.7%）、「屋内」（15件・28.3%）となっていた（表4）。また、活動場所については「野外炊事場（キャンプ場含む）」、「海上」（それぞれ8件・15.1%）が最も高い割合を占めており、次いで「宿泊室」、（5件・9.4%）となっていた（表5）。

表4 熱中症の症状がみられた時の環境

環境	7月		8月		9月		合計	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
屋内	8	26.7%	4	26.7%	3	37.5%	15	28.3%
屋外	22	73.3%	11	73.3%	5	62.5%	38	71.7%
不明	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	1.9%
計	30	100.0%	15	100.0%	8	57.1%	53	100.0%

表5 熱中症の症状がみられた時の活動場所

活動場所		7月		8月		9月		合計	
		件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
活動エリア (屋外)	山	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	1.9%
	グラウンド	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
	ウォークラリー	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%	2	3.8%
	野外炊事場 (キャンプ場含む)	5	16.7%	3	20.0%	0	0.0%	8	15.1%
	ハイキングコース	2	6.7%	0	0.0%	0	0.0%	2	3.8%
	ランニングコース	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	1	1.9%
	フィールド	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
	草スキー場	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
	野球場	4	13.3%	0	0.0%	0	0.0%	4	7.6%
	屋外球技場	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	1	1.9%
	海上	8	26.7%	0	0.0%	0	0.0%	8	15.1%
	船の上	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	1	1.9%
	敷地内 (広場、道など)	0	0.0%	3	20.0%	1	12.5%	4	7.6%
活動エリア (屋内)	体育館	2	6.7%	1	6.7%	0	0.0%	3	5.7%
	文武伝承館	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
	オリエンテーション室	0	0.0%	1	6.7%	2	25.0%	3	5.7%
	カッター艇庫	0	0.0%	2	13.3%	0	0.0%	2	3.8%
生活エリア	ロビー	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
	宿泊室	2	6.7%	2	13.3%	1	12.5%	5	9.4%
	ピロティ	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
	屋内 (詳細不明)	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
不明		0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	1.9%
計		30	100.0%	15	100.0%	8	100.0%	53	100.0%

※自由記述

3.2.5.症状が見られた時の活動内容

活動内容についてみると、「カッター研修」(10件・18.9%)が最も高い割合となっており、次いで「スポーツ活動(サッカー、ラグビー等)」(7件・13.2%)、「野外炊事/炊飯」(6件・11.3%)となっていた(表6)。

表 6 熱中症の症状がみられた時の活動内容

活動内容		7月		8月		9月		合計	
		件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
陸上活動	オリエンテーリング・ウォークラリー等	1	3.3%	1	6.7%	2	25.0%	4	7.6%
	スポーツ活動（サッカー、ラグビー等）	6	20.0%	1	6.7%	0	0.0%	7	13.2%
	陸上競技（長距離）	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	1	1.9%
	登山	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	1.9%
	草スキー	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
	教育事業等（屋外）	0	0.0%	4	26.7%	0	0.0%	4	7.6%
	野外炊事/炊飯	4	13.3%	2	13.3%	0	0.0%	6	11.3%
屋内活動 （運動）	柔道稽古	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
	キンボール	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	1	1.9%
水辺活動	カッター研修	8	26.7%	2	13.3%	0	0.0%	10	18.9%
	沢遊び	2	6.7%	0	0.0%	0	0.0%	2	3.8%
屋内活動 （文化活動）	合唱	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	1.9%
	ライブ	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	1.9%
活動前後	片付け	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
	説明を聞いているとき	2	6.7%	0	0.0%	0	0.0%	2	3.8%
	施設到着後	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
	活動後の移動中	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%	2	3.8%
	陸上部強化合宿中の閉校式	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	1	1.9%
生活時間	水辺活動の翌朝	1	3.3%	1	6.7%	0	0.0%	2	3.8%
	就寝前活動/起床後	2	6.7%	0	0.0%	0	0.0%	2	3.8%
	休憩中	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	1	1.9%
不明		0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	1.9%
計		30	100.0%	15	100.0%	8	100.0%	53	100.0%

※自由記述

3.2.6. 症状がみられるまでの状況

症状がみられるまでの状況について、自由記述で回答を求めたところ、「フィールドワークで1時間歩いた後に頭痛を訴えた」、「サッカーを外でして、少し時間が経ってから頭痛の症状を訴えてきた」、「野外炊事で作ったものを食べている途中で体調不良になった」、「午前中より、野外炊飯を開始。班活動でカレーを作る際に、火の近くにいた（中略）12時ごろより、体調に違和感あり」など、活動の後半になるにつれて体調が悪化するケースが見受けられた。

また、「カッター研修中、気分不良となった」（同様のケースが8件）というケースも見受けられ、水辺であっても直接水に浸からない、触れないものについても熱中症のような症状を引き起こしていることが分かった。

加えて、「自然の家への移動中」、「沢遊びに行く途中」、「活動と活動の移動中や準備中」といった記述も散見されることから、活動そのもの以外の移動中や活動の合間に体調不良になっていることも見受けられた。

その他、「屋内（宿泊室）が暑すぎる」、「空気の流れが悪い」、「毛布が多いなどが原因で、就寝活動中に体調不良を訴える」など室内の環境が要因と考えられる体調不良、屋内でのスポーツ活動中の体調不良（サッカー、柔道稽古）、前日の活動での体調不良を引きずったまま活動していたり、厳しい残暑により疲労をため込んでいるというケースも見受けられた。

3.2.7. 症状がみられた方の病院の受診状況と、処置静養後の状況

病院の受診状況と、処置静養後の状況についてみると、病院の受診状況は、「受診していない」

(48件・90.6%)、「受診後、帰宅」(2件・3.8%)であった(表7)。また、処置静養後の状況は、「活動継続」(41件・77.4%)、「帰宅」(9件・17.0%)であった。

表7 熱中症がみられた方の病院の受診状況

受診状況	7月		8月		9月		合計	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
受診していない	28	93.3%	13	86.7%	7	87.5%	48	90.6%
受診後、帰宅	1	3.3%	1	6.7%	0	0.0%	2	3.8%
受診後、入院	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
不明	1	3.3%	1	6.7%	1	12.5%	3	5.7%
計	30	100.0%	15	100.0%	8	100.0%	53	100.0%

3.2.8.症状について

症状をみると、「頭痛」(32件・60.4%)、「気分がすぐれない」(30件・56.6%)、「吐き気がする(嘔吐含む)」(24件・45.3%)が上位を占めており、次いで、「体が熱を帯びている」(15件・28.3%)、「たちくらみ」(14件・26.4%)となっていた。また、その他の症状として、「倦怠感」、「腹痛」、「胃痛」、「喉の痛み」、「両手指のしびれ」などが挙げられていた(表8)。

熱中症はその程度で大きく4つの病型(程度が低い順に「熱失神」、「熱けいれん」、「熱疲労」、「熱射病」)に分けられると言われているが(日本スポーツ振興センター)²⁾、回答の多かった「頭痛」や「吐き気がする」については、「熱疲労」でよく確認される症状でもある。国立青少年教育施設における体験活動中にも、中程度以上の症状を呈することがあることが分かった。

表8 熱中症として現れた症状

症状	7月		8月		9月		合計	
	件数	%	件数	%	件数	%	回答者数	%
たちくらみ	6	20.0%	5	33.3%	3	37.5%	14	26.4%
筋肉痛	0	0.0%	2	13.3%	0	0.0%	2	3.8%
大量に汗をかく	1	3.3%	5	33.3%	4	50.0%	10	18.9%
頭痛	21	70.0%	7	46.7%	4	50.0%	32	60.4%
気分がすぐれない	17	56.7%	9	60.0%	4	50.0%	30	56.6%
吐き気がする(嘔吐含む)	15	50.0%	6	40.0%	3	37.5%	24	45.3%
意識障害	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
けいれん	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	1	1.9%
体が熱を帯びている	5	16.7%	6	40.0%	4	50.0%	15	28.3%
その他(※)	1	3.3%	3	20.0%	2	25.0%	6	11.3%
不明	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	1.9%
回答者数	66		44		25		135	

※複数選択

3.2.9.要因について

要因をみると、本人に関することは「疲労」(30件・56.6%)、「寝不足」(15件・28.3%)、「体力不足」(12件・22.6%)が上位となっていた(表9)。指導者・引率者に関することは「注意不

足」(9件・17.0%)、装備に関することは「施設・設備の欠陥・不良」(3件・5.7%)、環境に関することは「気温」(48件・86.8%)、「湿度」(24件・45.3%)、「日差し」(22件・41.5%)が上位となっていた(表10)。また、本人、指導者・引率者、装備、環境のどれにも当てはまらない要因については、「風通しが悪かった」、「肥満気味」との回答があった。

表9 熱中症の症状を引き起こしたと思う本人に関する要因

要因・本人	7月		8月		9月		合計	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
不慣れ	1	3.3%	3	20.0%	2	25.0%	6	11.3%
寝不足	5	16.7%	8	53.3%	2	25.0%	15	28.3%
疲労	16	53.3%	10	66.7%	4	50.0%	30	56.6%
不安・心配・緊張	3	10.0%	3	20.0%	1	12.5%	7	13.2%
体力不足	5	16.7%	5	33.3%	2	25.0%	12	22.6%
アレルギー	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
該当なし	9	30.0%	0	0.0%	0	0.0%	9	17.0%
不明	2	6.7%	0	0.0%	1	12.5%	3	5.7%
回答者数	41		29		12		82	

※複数選択

表10 熱中症の症状を引き起こしたと思う環境に関する要因

要因・環境	7月		8月		9月		合計	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
天候(雨 など)	11	36.7%	4	26.7%	2	25.0%	17	32.1%
湿度	9	30.0%	11	73.3%	4	50.0%	24	45.3%
気温	26	86.7%	12	80.0%	8	100.0%	46	86.8%
日差し	14	46.7%	4	26.7%	4	50.0%	22	41.5%
高度(標高)	0	0.0%	1	6.7%	1	12.5%	2	3.8%
該当するものはない	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
不明	1	3.3%	1	6.7%	0	0.0%	2	3.8%
回答者数	62		33		19		114	

※複数選択

4. 成果(想定される安全対策)

4.1.活動計画等に関する対策

暑い日には活動時間を1時間程度に抑える必要性を認識することが重要である。熱中症に限らず、活動が後半になるにつれて疲労が増すケースがよくみられた。特に暑熱環境下では、暑さで体力を消耗しやすくなっているため、無理な活動継続はせず、水分補給や休憩をこまめにとるようにすることが求められる。

また、炎天下で活動を継続的に行っていることで、熱中症のような症状が出ていることが推察される。気温が30度以上で、湿度も50%を超える環境下で1時間程度活動していると、熱中症の症状がみられるケースが多い。そのため、こうした活動環境で活動する場合には、活動時間は

1 時間を超えない範囲に設定し、こまめな水分補給や休憩を心がけるようにすることが重要である。

4.2.生活・活動環境に関する対策

調査結果からは、屋内でも、水辺でも熱中症発症の可能性が示されたことから、生活環境のチェックも欠かさず行うことの大切さが示唆された。特に、宿泊室内の気温や、換気の状態、置かれているもの（今回の結果で言えば毛布）など、子供たちが数日間生活するのに適した生活環境になっているかの確認を行うことが求められる。空気の流れにより熱中症のような症状を引き起こしているケースもあったため、室内の空気の滞留についても留意することが必要である。

また、活動環境においては、陸上だけではなく水辺であっても、直接水に浸からない、触れないものについては、熱中症のような症状を引き起こすことが明らかとなったので、注意の必要性が示唆される。特に、カッターなど水上での活動については、照り返しにより熱中症になる危険性が想定されることにも留意する必要がある。

4.3.子供たち（利用者）に関する対策

子供たち自身では気づけないことから、指導者が気づき対応することが大切である。活動中だけではなく、活動前後の子供たちの様子をより細かく観察することの重要性も示唆された。活動を始める前から体調不良で帰宅しているケースや、前日の体調不良を引きずっているケースも見られたためである。

また、頭痛、気分がすぐれない、吐き気がするといった症状を訴える場合、3.2.8.症状についての記載のとおり、熱中症でも中程度の発症状況であることが疑われる。このため、こうした症状の子供が見られた場合には、周囲の子供たちの中にも同様の症状がある子供が潜在的に存在する恐れがあるため、他に熱中症の症状がみられる子供がいないか確認をとり、全体的に休憩をとるなどの対応が求められる。

そして、本調査の小学生の報告には、「活動中に吐き気を催したが本人の意向で活動を継続したところ嘔吐した」、「ウォークラリー中に塩タブレットを食べさせ、水分補給もさせながら活動を継続したが活動後に熱を測ったところ高熱（38℃）だった」というケースがあり、活動中には子供が自分自身の体調不良の程度の深刻さに気付いていないことが推察される報告もあった。指導者のきめ細やかな声掛けの他、活動前に子供たちに体調や水分補給の確認を行い、活動中には子供たちの様子を観察する。指導者が子供の体調管理を行うようにする。その上で、子供たち自身が異変を感じた際に指導者に適宜申し出ることができる環境づくりを利用団体内で醸成することの効果性も示唆された。

5. 課題

7月～9月にかけて月が進むごとに発症件数が減った理由として、8月、9月は気温や湿度が高い日など、熱中症の恐れがある日は意識的に活動を控えていることが考えられ、熱中症に対する認識の高まりや理解が浸透していることが推察された。アイシングや水分補給などの初期対応を行っているケースも多く見受けられたことから、熱中症のような症状が見られた時の対応について指導者や引率者側で理解している状況もうかがえた。時期や、活動環境に関わらず、活動当日の気温や湿度に加え、子供たちの生活環境をよく考えながら熱中症が起きないような予防的対策を講じることの大切さが示された。活動前には子供たちの体調や生活の様子を確認し、4.1～4.3

で示した対策を実践すること、暑さが和らぐ時期など、気温が低くても天候や湿度によっては熱中症のリスクが高いことを踏まえた対策をとることが考えられ、今回調査対象期間とした前後の期間についても注意を要することを申し添える。

今回の調査は、熱中症の件数が増える時期に差し掛かってから調査が始まっており、期間が短く、報告件数も少ない中で、その傾向を明らかにすることの一定の成果が見られた。しかしながら、次の点については次回調査の課題となる。5月頃など本格的に活動が始まる時期からの調査を実施することで、熱中症の危険性が高まる時期をより精緻に把握することができると考えられる。また、より調査対象が回答しやすい調査とするために、熱中症を引き起こすまでの間に、現場でどのようなことが起きているのか、調査項目意図が伝わる教示文を再度検討したい。これらの課題に対応したうえで調査を継続実施しつつ、今後の安全対策に資する結果を得られるよう尽力してゆく。

参考文献

- 1) 国立青少年教育振興機構 (2024) 国立青少年教育施設における傷病の概況 (令和4年度調査)
- 2) 日本スポーツ振興センター 「熱中症を予防しようー知って防ごう熱中症ー」パンフレット

